

ラテン教父の総合研究

——アフリカの司教殉教者キプリアヌス(2)

・ 吉 田 聖

目 次

はじめに

- I キプリアヌスの殉教のありさま
- II キプリアヌスの生涯
- III キプリアヌスの著作
- IV キプリアヌスの神学の特徴
- V 主著『カトリック教会の一致について』
——第4章のふたつのテキストをめぐって
まとめ——結論にかえて

はじめに

前号の『南山神学』にキプリアヌスの主著 *De Ecclesiae Catholicae Unitate* 『カトリック教会の一致について』を初めて邦訳して紹介した(第8号, pp 113-136 参照)。

そこで今回はラテン教父の総合研究を目ざす立場から、アフリカの司教殉教者キプリアヌスの全体像を素描し、合わせて前掲書第4章に関する、いわゆる改ざん論争についても言及してみたいと思う。

時代と状況の差はあれ、迫害の嵐のなかで粉骨砕身して司牧に徹し、ついには殉教をもって信仰をあかした牧者キプリアヌスの行動力とすべての人に対する細やかな配慮は、今日の日本の教会にも、さまざまな困難な

状況をのりこえて福音宣教に邁進する勇氣と光を与えてくれることと思う。

I キプリアヌスの殉教のありさま

ヴァレリアヌス帝によって 257 年から始められた新しい迫害によって、キプリアヌスは 258 年 9 月 14 日、カルタゴの近くで輝かしい殉教をとげた。迫害のさなかにあっては、信徒を慰め励まし、自ら信仰の証しの手本を示すことは牧者の第一のつとめであった。その殉教録の最後の部分は次のようにしるされている。

「9 月 14 日の朝、総督ガレリウス・マキシムスの命によって、大群衆がセクトゥスの別荘に押し寄せた。一方同総督は、これと同日に、キプリアヌスを自分のもとに連行するように命じた。

総督ガレリウス・マキシムスは、キプリアヌス司教が連行されて来たとき、『タスキウス・キプリアヌスとはおまえか』と尋ねた。

キプリアヌス司教は、『そうです、わたしです』と答えた。

総督は言った『おまえは、不敬な者どもに加担してかれらの司教になったのか。』

『はい、そうです』、キプリアヌス司教は答えた。

総督は言った、『至聖なる皇帝がたは、おまえがいけにえをささげるよう命令されておられるのだ。』

『そうするわけにはまいりません』、キプリアヌスは答えた。

ガレリウス・マキシムスは言った、『自分の身のためだ。よく考えてみよ。』

キプリアヌスは答えた、『あなたは、自分に命じられているとおりにおやりなさい。これほど明瞭なことをいまさら愚考するにもおよびますまい。』

ガレリウス・マキシムスは、議員たちと評議し、不承不承次のような判決を下した。『おまえは、ながい間背神的な精神をもって暮らし、多くの不敬な共謀者どもを集め、ローマの神々と神聖な宗教に敵対してきた。いつくしみ深いとも神聖なる皇帝、ヴァレリアヌス・アウグストゥス陛下、ガ

リエヌス・アウグストゥス陛下、また、いとも尊くあらせられるヴァレリアヌス・カエサル陛下も、おまえをみずから信奉される宗教にたち返らせることはできなかつた。したがって、おまえが、最も邪悪な罪業の発頭人、煽動者であることが判明した。そこでおまえは、おまえの罪によってかり集められた者どものよしみせしめとなるのだ。おまえが血の罰を受けることによって、この国のおきてを固めるのである。』こう言って、総督は最後に、板に書かれた判決文を読み上げた。『タスキウス・キプリアヌスは、剣によって処罰されるべし。』キプリアヌス司教の答えはただ一言、『神に感謝いたします』ということばであった。⁽¹⁾

「この有罪の宣告を受けたキプリアヌスは、直ちに処刑に連れて行れた。かれは自分のマントを脱ぎ、次いでダルマチカを脱いで、それを助祭に渡した。かれはただ亜麻布の下着を留めていた。今やかれはひざまずき、長い祈りに没入した。かれは王者のような気前のよさで、金貨 25 枚を刑吏に手渡した。かれは自分で目隠し帯の結び目を作り、最後の犠牲を供えるために、ひとりの司祭と助祭の手でしばってもらい、致命の打撃をうけた。」⁽²⁾

この殉教録によれば、キプリアヌス司教が死刑の判決を受けると、多くのキリスト教徒たちは「われわれもかれといっしょに首を斬られよう！」と叫びながら、処刑場までかれのあとに従って入った、とある。このことから、キプリアヌスは司教として自分にゆだねられた信徒の群のために尽くし、どれほど愛され慕われていたかがうかがえよう。

殉教した日付は前述のとおり 258 年 9 月 14 日であるが、教会暦では 9 月 16 日に祝われることになっている。9 月 14 日が十字架称賛の祝日、9 月 15 日が悲しみの聖母の記念日あたっているためであろうか。

II キプリアヌスの生涯⁽³⁾

キプリアヌス(正しくは Thascius Caecilius Cyprianus)は 3 世紀初頭(200 年ごろ)に北アフリカの大都市カルタゴ(今日チュニジアと呼ばれて

いる地方)に生まれた。生年月日や少年時代については知られていない。かれの両親はキリスト信者ではなかったが、富裕だったので、かれは当時の最高の教育を受けることができた。学業を終えてから修辞学の教師と弁護士になった。そして、アフリカの首都であるカルタゴの社交界で、多くの有名人と交際し、人々の尊敬の的になった。しかし、多くの名誉と富に囲まれながらも、キプリアヌスは心の空虚さを隠しきれず、ついにキリスト教の研究に専念しはじめた。

その回心はカエキリウス *Caecilius* という名の老司祭との出会と感化に負うところが多く、のちにキプリアヌスはかれの名をもらってタスキウス・カエキリウス・キプリアヌスと名乗るようになった。そして246年に受洗し、一心に福音のおきてに従うようになった。自分の財産のほとんどすべてを貧者に施し、世俗的な学問に仕える代わりに、聖書とキリスト教著述家の研究に没頭した。回心後まもなく司祭に叙階され、さらに248年から249年のはじめころには、キリスト信者たちの推せんの声によってカルタゴの司教に選出された。キプリアヌスは、燃えるような熱意をもって、司教職の遂行にあたった。

しかし、教会はローマのデキウス *Decius* 帝(249—251年)の下に、ローマ帝国全体のキリスト教撲滅をめざして初めて組織的に計画され、一貫して行われた第1回キリスト教大迫害に直面することになり、キプリアヌスもその職務を一時断念しなければならなくなった。250年1月にキリスト教禁教令が発布され、ローマ帝国領内の全住民はローマの異教の神々に犠牲をささげるよう命じられた。犠牲委員会が組織され、その面前で一人ひとりが異教の神々に犠牲をささげねばならなかった。この命令を拒絶したキリスト教徒たちは、獄に投ぜられ、恐ろしい拷問を受け、その多くは殺害された。犠牲をささげた人にはその証明として、リベルルス *libellus* という書きつけが交付された(いまも多数残存している)。

この大迫害で殉教者 *martyres* や信仰告白者 *Confessores* がたくさん出たが、長い間の平和な時代に慣れて脆弱になった人たちは棄教してしまっ

た。ラプシ lapsi (背教者) と呼ばれるこれらの人々の中には聖職者もいれば司教もいた。なかには、いけにえを異教の神々にささげないのに、ささげたとする証明書を不正な手段で入手する者もいた。

250年1月20日教皇ファビアヌス Fabianus (236-250年) が殉教したが、それとほぼ時を同じくして、キプリアヌスは安全な場所へと身を隠した。そしてその隠れ家から、たびたび文通という形で聖職者や信徒と連絡を保った。敵対者はこのことをひっきりなしに非難した。しかしカルタゴにそのままとどまることは自分の死を招くばかりでなく、他の者にもさらに大きな危険を生じ、結局牧者のいない状態になりかねなかった。ローマでも新しい司教の選任は不可能で、ファビアヌス教皇殉教後は、司祭と助祭の一派が教皇空位期間中のローマの教会を取りしきった。彼らは教皇殉職の知らせと同時にもう一通の手紙を送り、カルタゴの司教の逃走に驚きを表明した。

キプリアヌスはただちに彼に宛て、自分の諸活動の詳細な報告と、一時退却を決断したことの釈明を書き送っている。そしてこの手紙にそえて、聖職者、信仰告白者、共同体に宛てて13通も送っている。そこで彼は自分が決して司教としての任務を放棄したのではないということを明示しようとしている。彼の著作は当時のカルタゴで生じていた宗教上の難題を如実に示している。すなわち、迫害中にキリスト教信仰を拒否した者たち(ラプシ)を再び復帰させる件で、意見の不一致が生じ、結局それがもとで教会は分裂という結果を招くことになるわけである。

ある信仰告白者たちは自ら宗教上の問題に関して権威を有すると考え、棄教者もその信仰の程度の差はあるにせよ、妥協して彼らを復帰させよと要求した。キプリアヌスは拒否すると、助祭のフェリキシムス Felicissimus は信仰告白者と棄教者の中で同調する者を集め、反対グループを結成した。そしてキプリアヌスの司教叙階に反対した5人の司祭とも合流した。そのうちの一人ノヴァトゥス Novatus はローマへ行き、新教皇コルネリウス Cornelius の反対者ノヴァチアヌス Novatianus の支援者と

なった。

251年の春カルタゴに戻ったキプリアヌスは、まずフェリキシムスとその一団を破門制裁し、二通の司教書簡を書き送った。それが *De lapsis*『背教者』と *De Ecclesiae Catholicae Unitate*『カトリック教会の一致』に関するものであった。おそらく251年5月ごろに司教会議が開かれ、キプリアヌスによって原則が定められ、敵対者の破門制裁が承認された。すべての背教者は、例外なしに、痛悔を認められるべきであること、また少なくとも臨終の時に教会と和解し復帰が認められるべきことも決められた。償いの期間は個々のケースによって多種多様であった。

その後大疫病が発生し、神々の復讐の責任をとられた形でキリスト信者に対する迫害が生じた。この大災害に苦しんでいるすべての人に対して、キプリアヌスは慈愛あふれる援助と病人の世話につとめ、異教徒の怒りをなだめたのであった。

晩年のキプリアヌスは異端者の洗礼論争に没頭した。カルタゴでは、そのような儀式は徹底的に拒否するのが伝統になっていたようである。テルトゥリアヌス *Tertullianus* はその著 *De baptismo*『洗礼論』で、そのような洗礼は無効だと明言している。この立場は220年頃アグリッピヌス *Aggripinus* によって召集されたアフリカとヌミディアの司教による教会会議で承認され、さらに255年と256年カルタゴで3回開催された司教会議——そこではキプリアヌスが議長をつとめる——でも再び承認された。この決議事項をしらされた教皇ステファヌス *Stephanus* (254–256年) は、教会の伝統に反して新奇なことを導入すると、露骨な口調で警告したが、キプリアヌスは動じなかった。

ヴァレリアヌス *Valerianus* 帝 (253–260年) もデキウス帝の前例にならって、治世の晩年には迫害者となった。教皇ステファヌスが信仰のために殉死することになったこの迫害で、キプリアヌスも257年8月30日クルビス *Curubis* 市へと追放されることに決まった。そして約1年後の258年9月14日、カルタゴの近くで斬首され、アフリカの最初の司教殉教者と

なった。

III キプリアヌスの著作⁽⁴⁾

キプリアヌスの執筆活動はその生活現場の状況と密接に関連していて、どの著作もそれぞれの状況に応じて、実践的な目的を持って書かれている。彼は神学的な考察に没頭するよりも、人々の霊的指導に深い関心を抱いていた“行動の人”であった。彼の言葉使いと文体は洗練されていて明解で、聖書の語彙やイメージから多大の影響を受けている。彼の著作は(1)論文と(2)書簡に大別される。

(1) 論 文

- 1) Ad Donatum 『ドナトゥスに与う』⁽⁵⁾
- 2) De habitu virginum 『おとめの身だしなみについて』⁽⁶⁾
- 3) De lapsis 『背教者について』⁽⁷⁾
- 4) De Ecclesiae Catholicae Unitate 『カトリック教会の一致について』⁽⁸⁾
- 5) De Dominica Oratione 『主の祈りについて』⁽⁹⁾
- 6) Ad Demetrianum 『デメトリアヌスに与う』⁽¹⁰⁾
- 7) De Mortalitate 『死ぬことについて』⁽¹¹⁾
- 8) De Opere et Eleemosynis 『労働と施しについて』⁽¹²⁾
- 9) De Bono Potentiae 『忍耐のよさについて』⁽¹³⁾
- 10) De Zelo et Livore 『ねたみとしとについて』⁽¹⁴⁾
- 11) Ad Fortunatum 『フォルトゥナトゥスに与う』⁽¹⁵⁾
- 12) Ad Quirinum 『クィリヌスに与う』⁽¹⁶⁾
- 13) Quod idola dii non sunt 『偶像は神々ではないこと』⁽¹⁷⁾

(2) 書 簡⁽¹⁸⁾

合計 81 通 (そのうちの 65 通はキプリアヌスからのもので、あとの 16 通は

キプリアヌス宛かあるいはカルタゴの聖職者宛のもの)。第1～4までと、第62, 63, 65の合計7通(キプリアヌスの書いたもの)は散失している。

第5～43: デキウス帝迫害の時。27通は聖職者や信徒向け。

第44～66: 教皇コルネリウスとルキウスとに宛てた書簡と返信。

第44～55はノヴァチアヌスの教会分裂に関するもの。

第67～75: 教皇ステファヌスの時に、おもに洗礼問題。

第78～81: 最後の追放の地より。

IV キプリアヌス神学の特徴

キプリアヌスはテルトゥリアヌスほどの独創性も、オリゲネス Origenes ほどの思考力も持ち合わせていなかったが、アウグスティヌスの時代まで、西方教会の神学的権威であった。アウグスティヌス以後も中世を通して最も愛読された初代教父のひとりで、とくに教会法に与えた彼の影響は大きかった。彼の教えの中心思想は、なんといっても教会の本性についての考え方にある。しかし、キプリアヌス神学の特徴については、J. Quasten が手際よくまとめているので、ここではそれを私なりに短く紹介するに留めたい。⁽¹⁹⁾

(1) 教会論

キプリアヌスにとって、救いの道は教会しかなかった。だから彼は端的に、しかも明確にこういう——「教会の外に救いなし」(Salus extra ecclesiam non est.) (cf. Ep. 73, 21,)。また「教会を母として持たない者は、神を父として持つことができない」(Habere iam non potest Deum patrem qui ecclesiam non habet matrem.) (De Eccl. Unit. 6)。したがって、教会内にとどまることが最も重要で、そうしないなら、どんな人もキリスト者たり得ないのである(cf. Ep. 55, 24)。教会はキリストの浄配であり、姦通者とはなり得ないから、「誰でも教会から離れて姦婦と交わる者は皆、教会の約束から離れていきます。そしてキリスト教会から離れ去る者

はキリストの報いを受けることができないのです。彼は他人であり、聖徒ではなく、敵なのです。」(cf. De Eccl. Unit. 6)。教会の根本的特徴——それは教会がひとつであること——で、それを記述するのにいろいろなイメージを使っている。たとえば、キリストの着ていた「縫い目のない衣」(同7参照)もその一つである。また彼は教会を「ノアの箱船」——それに乗らずに外にいて、救われた者はだれもいない——と比較したり(同6参照)、聖体祭儀の一つのパンを形作っている無数の麦の粒(cf. Ep. 63, 13)や、司教が水先案内人である船(cf. Ep. 59, 6)にも比較している。しかし彼が最も好んで使う(30回以上も)のは「母親」のイメージで、大家族の中で子どもたちといっしょにいる母、心身共にひとつに結ばれている者をその胸に抱きしめている、しあわせな母のイメージ(De Eccl. Unit. 23)である。したがって自分を母の体内から切り離す者は、自らに死を宣告するものにほかならないのである(ibid)。

また分裂の危機に直面し、教会の一致が危険にさらされた時、彼は『教会の一致について』を著わしてそれを弁護し、多くの書簡の中で、教会のメンバーは司教に従うようさとしている。「司教は教会の中におり、教会は司教の中にあること、そして司教と共にいない者は誰でも教会と共にいない人であるということをわきまえなければならない。」(cf. Ep. 66, 8)。教会共同体が中心として集う所である、目に見える権威——それが司教なのである。普遍教会の連帯は司教たちの務めであり、彼らは司教会議でそのことも取り扱うのである。

(2) ローマの首位権 Primatus Petri

ペトロの死後、ローマ教皇座につく後継者はいつも全教会の上にローマが首位権をもつことを要求した。しかしその特権は初代のキリスト教徒特有の状況のゆえに、めったに行使されなかった。また反対もあった。そしてそのような妨害は徐々に征服されていった。

キブリアヌスはローマの首位権との関連で、こうのべている。「友情の絆

が保たれ、カトリック教会の聖なる一致が続いている限り、各司教は自らの行動の主人として、いつの日か主キリストに対して自らの決算報告をしなければならないと自覚している」(cf. Ep. 55, 21)。彼の確信していたことは「司教たる者は神に対してのみ責任を負う」ということであった。教皇ステファヌスとの論争——異端者の再洗礼問題——でも、彼はアフリカの司教会議(256年9月)で、議長としてつぎのように発言している。

われわれのうちのだれひとりとして、自分を司教中の司教に立てたりするものはないし、暴君や恐怖によってその仲間にも強制的な従順を強いる者もない。どの司教でも、自由と権力を束縛されない状態にあり、自分の考えに従う権利を有している。他人を裁くこと以上に、他人から裁かれることもできないわけである。われわれはみな主イエズス・キリストの裁きを待つべきである。キリストのみが教会統治者を任命し、そこに在るわれわれの行動を裁く権利を持っているのである(CSEL 3, 1, 436)。

以上の論述からしてみると、キプリアヌスが司教団に対するローマ司教の裁治権の首位性を認めていないことは明白である。ペトロは他の使徒たちに及ぶ権能を授かったというふうにキプリアヌスは考えていない。hoc erant utique et ceteri apostoli quod fuit Petrus, pari consortio praediti et honoris et potestatis. (De Eccl. Unitate 4)。そして、そのことをペトロも求めていなかったことをつぎのように述べている。「主が最初を選び、その上に教会をたてたペトロでさえ、のちに割礼の問題でパウロと論争した際に、自分のために何の特権も求めず、傲慢なでしゃばりもせず、自分には首位権があるから文句なしに従えとも言わなかった」(cf. Ep. 71, 3)。

他方、教会の一致と信仰の重要性に関してローマの教会に最大の賛辞を送っているのも、この同じキプリアヌスである。ペトロの座 *Cathedra Petri* とは、かれにとって「主要な教会」であり司祭職の一致の出発点なのである。ただローマの司教が他司教区を統治するような高次元の権能を認めないという点は、書簡(Ep. 59, 14)で明言している。「というのも牧者はそれぞれ別の群の指導と統治と、主に対するその職務の会計報告をするよ

うに任命されているからです」(Ep. 59, 14)。

ダニエルーによれば、キプリアヌスはその思考に二元性がある。かれは自分が二つの流れの合流点に居ることを承知してはいるものの、その二つの流れをいかに調整すればよいのかまだ見い出せないでいるのである。普遍教会の一致、とりわけローマの首位権を維持してはいる。しかし地方司教の諸権利にも心を動かされているのである。キプリアヌスは首位権の偉大な証人のひとりである。むしろ抗争の根元はローマ首位権の拡大の限界である。キプリアヌスが拒絶するのは、地方教会の特権に属する分野へのローマ司教の干渉である。⁽²⁰⁾ この問題は教会史の中で長い間論争の種となり、第2ヴァティカン公会議の『教会憲章』第3章「教会の聖職位階制度、特に司教職について」で詳しく取り扱われるにいたったのである。

(3) 洗 礼

異端者の授けた洗礼は無効だとするキプリアヌスは幼児洗礼に関してはテルトゥリアヌスと意見を異にしている。テルトゥリアヌスはキリストを知るに足る年齢に達するまで洗礼を延ばすようにすすめるが(cf. De bapt. 18)、生後なるべくはやく、しかも生後8日間待つという習慣さえも排斥しているのがキプリアヌスである。フィドゥス Fidus 宛の書簡(Ep. 64)で司教会議の決定についてつぎのように述べている。「幼児洗礼に関しては生後2～3日以内に洗礼を授けるべきではないとお考えのようですが、そしてさらに古代の割礼上の規則も遵守されねばならないので、誕生後すぐではなく、8日以内に洗礼を授かり聖化されなければならないとお考えのようですが、わたしたちの司教会議では一同全く別の考えでした。この件であなたのお考えどおりにしなければならぬと考えた人はひとりもいませんでした。わたしたちはみな、むしろ、どんな人でも生まれたなら神のあわれみと恵みを拒絶すべきではないと判断しました。霊的割礼が肉体的割礼によって妨げられてはならないのです。アダムに従って肉により生まれることによる罪のほかは何の罪も犯していない幼児を、洗礼から遠ざける

ことを減らさねばなりません。幼児はその誕生の瞬間から、いにしへの死の影響を受けていますが、その罪のゆるし——つまり自分自身のものではなく他の人の罪であっても自分にゆるし——が与えられるということを、より容易に受けることができるのです (ANF 5)。

キプリアヌスはテルトゥリアヌスと同様、もう一つの洗礼、いっそう恵み深く、力強くて効果のある洗礼、すなわち殉教における血の洗礼を知っていた。そこで、洗礼志願者が信仰のために死ぬなら、洗礼の秘跡の効果を決して奪われたいと書簡 (Ep. 73) で述べているのである。『フォルトゥナトゥスに与う』Ad Fortunatumの序でふたつの洗礼を比較して述べてから、血の洗礼についてこう述べている。「この洗礼は恵みにおいてより偉大で、力においてよりすぐれ、榮譽においてより高貴であり、神の使いたちが奉仕する洗礼、神と油を注がれた方〔キリスト〕が歓喜する洗礼、罪が完全になくなる洗礼、この世から旅立つときわたしたちを神とただちに一致させる洗礼なのです。」このことばの中に、キプリアヌスが確信していたこと、すなわち殉教者は死後ただちに天国にはいるが、他の人々は裁きの日まで主の裁きのことばを待たねばならないということが明示されている。⁽²¹⁾

(4) 罪の償い——悔悛の宗規に関する問題

カルタゴでは、ある司教たちは信仰告白者のとりなしによって直ちに悔悛を認め、「棄教者」(ラプシ)を教会と和解させ、再入門させていたのである。このような考え方に直面し、キプリアヌスは自分の考えを開陳する。かれは信仰告白者の調停は拒まない。棄教者の教会との和解の可能性も認める。しかし長期にわたる厳重な悔悛期間が必要であると力説する。臨終の際を除き、回心が十分確固たるものにならない限り、教会との和解はできないのである。和解を数回反復する可能性も認めた。それゆえ、キプリアヌスはかれが批判する司祭たちよりはるかに要求が多いようである。しかし、テルトゥリアヌスのような極端な厳格主義は取らない。テルトゥリア

ヌスによると、教会には、教会によって赦すことのできない罪があり、背教の罪はその一つなのである。しかも、かれは悔悛の反復は全く不可能であると主張している。⁽²²⁾

キプリアヌスによれば、公の罪の償いは①罪のゆるしの秘跡、②罪の大きさに従って課せられる償い、③償いを果たし終えたのちの和解という三つの行為から成っている。「親愛なる兄弟たちよ、各々自分の罪を告解しなさい。罪を犯した人が生きている間に、その告解が聞きとられる間に、その償いが果たされ、司祭によって与えられる罪のゆるしが神を喜ばせる間に…」(cf. De lapsis 28; Ep. 16, 2)。またキプリアヌスは、罪の償いのわざの主観的・個人的な要素でも罪のゆるしをもたらす効果があるとみている(cf. De lapsis 17; Ep. 59, 13)。和解は教会の公的手続きであり、生命の担保(pignus vitae; cf. Ep. 55, 133)である。このようにキプリアヌスはいやしの力と和解という行為の秘跡的性格を強調しているのである。⁽²³⁾

(5) 聖体の秘跡

キプリアヌスの書簡〔第 63〕「主の杯の秘跡について」はニカシア公会議以前の聖体祭儀に関する唯一の公文書である。この書簡の中で「犠牲」という考え方がでてくるが、これは教理史上重要性を有しているものである。司祭の犠牲はまさに最後の晩餐の繰り返しであり、キリストはそこでご自身をおん父にささげられたのである。「もしもイエズス・キリスト、われらの主であり神である方が、ご自身父である神の大祭司であり、またおん父にご自身を犠牲として最初にささげ、その記念としてこれを行うよう命じられたとすれば、キリストがなさったことを模倣する司祭はキリストのつとめを誠実に果たすこと、またキリストご自身がささげたことの中に見ていることがらに従って、司祭は真の、そして十全の犠牲を教会において父なる神にささげていることは確かなのです。」(cf. Ep. 63, 14)

このように主のおん体とおん血が奉献(oblatio)であるという教えに明白な形で証明を与えるのはキプリアヌスが最初である。最後の晩餐および

教会の聖体祭儀は、両者とも十字架上のキリストの犠牲の再現 (repraesentatio) なのである。聖体祭儀は「主のご受難とわれらのあがないの秘跡」(dominicae passionis et nostrae redemptionis sacramentum; ibid.) と呼ばれている。主のご受難こそわれわれがささげている犠牲であるから、どの犠牲においても主のご受難に言及するのである。奉献であり犠牲であるから、主がなさったこと以外何もするべきではないのである。「もしも杯の中にぶどう酒がなければ、キリストのおん血はささげられません。われわれの奉献と犠牲も主のご受難に対応しない限り、主の犠牲は合法的な聖別をもって祝われることにはなりません。」(ibid. 9)

聖体祭儀の客観的価値は魂の安息のためにささげられるという事実からしても明らかであり (cf. Ep. 1, 2), 殉教者のためにもささげられる。「殉教者たちの受難と殉教記念日を祝うたびごとに、われわれは彼らのために犠牲をささげるのです。」(Ep. 39, 3;12, 2)

キプリアヌスは聖体の秘跡のパンの中にキリストと信者と教会の一致の象徴的きずなを見てこう述べている。「この秘跡においてこそ、われわれは一つになったものとして示されます。多くの粒と同じ仕方で集められ粉々にされ、ひとかたまりになるように混ぜ合わされ、こうして一つのパンとなるのです。こうして、天のパンであるキリストのうちにあって、ひとつの体となり、互いに結び合わされ一体となることがわかるのです。」(Ep. 63, 13) またぶどう酒と水の混合の儀も同じことを意味していると説く。「水がぶどう酒と杯の中で混ぜ合わされるとき、キリスト者もキリストと一つになり、信者の集いは自らが信じる方と結ばれ一つとなるのです」(ibid.)。

キプリアヌスは、カトリック教会以外で行われる聖体祭儀は、異端者の授ける洗礼と同様無効だとみなしている。第72の書簡でステファヌス教皇宛に、アフリカとスミディアの71人の司教が承認した司教会議の決議報告をしてつぎのようにのべている。「そのような(カトリック教会以外の聖体祭儀をさす)犠牲は“偽りで冒瀆的なもの”であり、“一つの神聖な祭壇”に

反するものです」(ibid.)。ところが、こうした考えは4世紀のドナトゥス派の分裂に際し、彼らの主張した考え方、つまり秘跡の効果は秘跡の授与者の聖性にかかっているという主張に利用されるようになったのである。⁽²⁴⁾

第2ヴァティカン公会議の『典礼憲章』26番ではキプリアヌスのことばが引用され、教会は「一致の秘跡」すなわち、司教のもとに一つに統合された聖なる民である(cf. De Eccl. Unit. 7)と述べられている。

VI 主著『カトリック教会の一致について』

——第4章のふたつのテキストをめぐって

『南山神学』第8号で紹介した上記の拙訳はキプリアヌスの全著作中でもっともよく知られ、またもっともよく引用されているものである。そのおもな理由はふたつある。(1)3世紀中葉の教会⁽²⁵⁾が直面していた三つの大きな問題のうち、とくに「教会の組織」に関して、司教職の問題を取り上げ、カルタゴの司教団とローマの司教の首位権に関する問題を論じているからである。(2)宗教改革以降、第4章のふたつのテキストとその解釈をめぐって意見が分かれたためである。

ここでは、現在イギリスでキプリアヌスの研究を行っているベヴノ師 Maurice Bévenot, SJ.の所説を中心に、第4章のふたつのテキストをめぐって展開された研究を紹介してみたいと思う。

(1) 第4章のふたつのテキスト(ラテン語)

DE ECCLESIAE CATHOLICAE UNITATE

4. Quae si quis consideret et examinet, tractatu longo adque argumentis opus non est. Probatio est ad fidem facilis compendio veritatis; loquitur Dominus ad Petrum: *'Ego tibi dico inquit quia tu es Petrus et super istam petram aedificabo ecclesiam meam, et portae*

inferorum non vincunt eam. Tibi dabo claves regni caelorum, et quae ligaveris super terram erunt ligatae et in caelis, et quaecumque solveris super terram erunt soluta et in caelis.^{1'a}

(I)

Et idem² post resurrectionem suam dicit illi: *'Pasce oves meas.'*^b Super illum aedificat ecclesiam et illi pascendas oves mandat et, quamvis apostolis omnibus parem tribuat potestatem, unam tamen cathedram constituit et unitatis originem adque rationem sua auctoritate disposuit. Hoc erant utique et ceteri quod fuit Petrus, sed primatus Petro datur et una ecclesia et cathedra una monstratur; et pastores sunt omnes, sed grex unus ostenditur qui ab apostolis omnibus unanimes consensione pascatur. Hanc Petri⁸ unitatem qui non tenet, tenere se fidem credit? Qui cathedram Petri, super quem⁹ fundata ecclesia est, deserit, in ecclesia se esse confidit?²

(II)

Super unum aedificat³ ecclesiam⁴ et, quamvis apostolis omnibus post resurrectionem suam parem potestatem tribuat et dicat: *'Sicut misit me Pater et ego mitto vos, Accipite Spiritum sanctum: si cuius remiseritis peccata remittentur⁵ illi; si cuius tenueritis⁶ tenebuntur⁷,'*^c | tamen, ut unitatem manifestaret, unitatis eiusdem originem ab uno incipientem sua auctoritate disposuit. Hoc erant utique et ceteri apostoli quod fuit Petrus, pari consortio praediti et honoris et potestatis, sed exordium ab unitate proficiscitur ut ecclesia Christi una monstratur. ¹⁰Quam unam ecclesiam etiam in Cantico Canticorum Spiritus sanctus ex persona Domini designat, et

dicit : *'Una est columba mea, perfecta mea, una est matri suae, electa genetrici suae.*'^d'¹⁰ Hanc ecclesiae unitatem qui non tenet, tenere se fidem credit? Qui ecclesiae renititur et resistit, in ecclesia se esse confidit, quando et beatus apostolus Paulus hoc idem doceat et sacramentum unitatis ostendat dicens : *Unum corpus et unus Spiritus, una spes vocationis vestrae, unus Dominus, una fides, unum baptisma, unus Deus*^e?

5. Quam unitatem tenere firmiter et vindicare debemus ¹ maxime episcopi, qui in ecclesia praesidemus,¹ ut episcopatum quoque ipsum unum adque indivisum probemus. Nemo fraternitatem ²mendacio fallat, nemo fidei veritatem² perfida praevaricatione | corrumpat.

Episcopatus unus est cuius a singulis in solidum pars tenetur. Ecclesia una est quae in multitudinem latius incremento fecunditatis extenditur : quomodo solis multi radii sed lumen unum, et rami arboris multi sed robur unum tenaci radice fundatum, et...

4. ^aMatt. 16 : 18 sq. ; cf. Cypr. *ep.* 33. 1 ^bJohn 21 : 17 ^cJohn 20 : 21 sqq. ^dS. of S. 6 : 9 (8) ^eEph. 4 : 4 sqq.

4. ¹caelis] *add.* Et idem post resurrectionem suam dicit : Pasce oves meas eV *et al.* ²⁻²Et idem. . . confidit ? (line 31)] *Hic textus prior, sive solus ; sive praecedens textum alterum ; sive cum ipso conflatus* T *et al.* ³aedificavit e ⁴ecclesiam] *add.* et illi pascendas oves mandat e ⁵remittuntur YaRVg ⁶retinueritis eVg ⁷retenta sunt eVg ⁸Petri] et Pauli *al.* ; ecclesiae (suae) *al.* ⁹quem] quam *al.* ¹⁰⁻¹⁰Quam. . . suae (line 34) *om.* p

5. ¹⁻¹maxime. . . praesidemus] *om.* T ²⁻²mendacio. . . veritatem] *om.* T

(2) 第4章のふたつのテキストの試訳

『カトリック教会の一致について』

4. 以上のことは誰が考察し吟味しても、長い議論や証明はいりません。この立証は真理を要約するだけで、容易に確信させることができます。主はペトロに言われました。「お前は岩である。この岩の上にわたしの教会を建てる。死の力もこれに対抗できない。わたしはお前に天の国の鍵を授ける。お前が地上で禁止することは、天上でもそのまま認められる。お前が地上で許可することは、天上でもそう認められる」(マタ 16, 18 ; 16, 19.)。

(I)

そして、主は復活ののちに同じことをかれ(ペトロ)に言われました。「わたしの羊の世話をしなさい」(ヨハ 21, 17)。主が教会をたてたのはかれの上であり、その世話もかれにまかされたのです。そして、主はすべての使徒に同じ権

(II)

主はひとりの人の上に教会を建てられたのです。復活ののちに、主は使徒たちのおのおのに同じ権能を与えて言われました。「父がわたしをお遣わしになったように、わたしもお前たちを遣わす。…聖霊を受けなさい。お前たちがだれか

能 (potestas) を与えたにしても、ひとつの座をさだめ、主の權威によって教会の一致和合の起源と根拠を定められたのです。他のすべての使徒がペトロがそうであったのと同じであったことは確かであるが、首位性 (primatus) はペトロに与えられ、こうして一つの教会、一つの座が明示されているのです。またみんなが牧者であるが、群はひとつであることを示しているのです。その群は全使徒の心からの一致した同意にもとづいて導かれているのです。ペトロとのこの一致を保たない人は、どうして自分は信仰を守っているなどと思えるのでしょうか。教会がその上に建てられたペトロの座を放棄する人が、どうして依然として自分は教会の中にいると確信するのでしょうか。

の罪をゆるせば、その罪はゆるされる。お前たちがゆるさねば、ゆるされないまま残る」(ヨネ 20, 21-22)。それにもかかわらず主はその一致をよく示すために、全権をもってこの一致の起源はひとりの人に由来することを定められました。無論他の使徒たちもペトロと全く同じ名誉と権能とを賦与されましたが、その由来は一致から出ているのです。それによって教会が一つであることが証明されるためです。また教会の一致は雅歌の中で聖霊が私たちの主役をつとめて言われます。「わがはと、わが全き者はただひとり、彼女は母のひとり子、彼女を産んだ者の最愛の者だ」(雅歌 6, 9)。教会のこの一致を保たない者が自ら信仰を持っていると考えるのでしょうか。(教会の基であるペトロの座を捨てて願みず) 教会に逆らい反抗するものが、教会のうちにあると確信しているのでしょうか。聖なる神秘の一致をさして聖パウロは次の言葉をもって同じことを教えています。「体は一つ、霊は一つです。それは、あなたたちが、一つの希

望にあずかるようにと招かれているのと同じです。主は唯一、信仰は一つ、洗礼は一つです。すべての人の父である神は唯一です」(エフェ 4, 4-6)。

5. この一致を私たちはゆるぐことなく確保し、擁護しなければなりません。これはとくに教会の目上である司教が司教職は一つであり分ち得ないことを証明するためです。誰も偽りをもって(教会の)兄弟たちを欺いてはなりません。誰も不信のごまかしによって信仰の真理を偽造してはなりません。

司教職は一つであり、各自は全体のためにおのこの役目を保持しているのです。教会も一つですが、さかんに成長し、さらに数多く広まっています。太陽のように光線は多いが光は一つです。樹木のように枝は多いが一つの強い根の上に幹をすえています。

(3) いわゆる第4章の改ざん論争について⁽²⁶⁾

『カトリック教会の一致につて』De Ecclesiae Catholicae Unitate はこれまでふたつの異なる版で印刷されてきた。ここで(II)「第二版」(TR = Textus Receptus)と(I)「第一版」(PR = 'Primacy' Text)として併記されている箇所である。写本によっては、両者をひとつにしたり、PTのあとにTRのをせたり、さまざまな形で印刷されたため、異なる様相を呈するようになって、多くの学者たちに原文が教皇権に関連して偽造され、の

ちに改ざんされたのではないかと思わせた。

今世紀初頭、D. チャプマン Dom John Chapman はこれらの一見改ざん箇所と思われるものが実はもう一つの版の一部にびったり一致することを初めて指摘した。そしてこのことは続いて進められた写本研究によって確かめられた。さらに、TR (第二版) がPT (第一版) の改訂版であり、その逆ではないこと、双方ともキプリアヌスの手によってなされているまでつきとめられた。つまりPT (第一版) は251年のキプリアヌスの手による初版であるという結論である。そしてこの結論は詳細に検討を加えられることになった。

しかし、この結論はひじょうに興味深い問題を提起することになった。「首位権はペトロに与えられた」とか「教会がその上に建てられたペトロの座を放棄する人が、どうして依然として自分は教会の中にいると確信するのか」といった文章が含まれている箇所が改ざんされたものだったのか、あるいはローマ教会の権利を擁護する教皇支持派の手による後代の挿入なのか、それともキプリアヌス自身の手によるオリジナルなのか、という問題である。この問題は一般にカトリックとプロテスタントの教会で意見が分かれていて、こういう意見はキプリアヌスの通常の態度とは違ふと主張するのが後者(プロテスタント)である。しかし今や問題点は、改ざんかどうかということではなく、このふたつのテキストが問題となっている。つまり教皇支持派の手による後代の書き直しであるとしても、不利な文章、たとえば「主は(ペトロと)同じ権能をすべての使徒に与えた」とか「他のすべての使徒がペトロがそうであったのと同じであった」とかいう箇所をどうして削除しなかったかという疑問が残る。他方、雅歌や聖パウロの引用句を削除した動機は何か、さらに司教たちの一致団結を呼んでいる文章も削除したのはなぜか。いずれにせよ、ローマの受けをよくするものは皆無である。

しかし、もしもPT (第一版) が後代の偽造ではないとしたら、「首位権」とか「ペトロの座」とかいう語句をどうしてキプリアヌスは使ったのか。ま

たどうして、あとで書き直したり、削除したりしたのか。第一の問の答えは比較的容易であるが、第二のは推測的にならざるを得ない。当時“Primatus”という語は今のようなニュアンスで使われてはいないのである。それは通常、一時的な優位性しか示していないのである。キプリアヌスは、その弟にゆずってしまった長子権とエサウの関連で、ペトロがパウロより優位にいることを示しているにすぎない。「ペトロの座」に関しては、ふつうローマ聖座について使われており、キリストがそのうえに建てた教会の(ペトロの)司教職から由来している司教職をさしている。キプリアヌスはたびたびそれを繰り返している。このようにみると、上述の語句は何らローマ色を出してはいないのである。「ペトロは最初に、あとの使徒はみな等しい」という表現になっていても、いずれにせよ、キプリアヌスの強調している点は、使徒たちの一致、司教たちの一致、そして教会の一致ということである。

したがって、教皇支持派的な意味あいこれを「改ざん」と解するならばカトリックもプロテスタントも双方とも誤りとなる。H. コッホ Hugo Kochらプロテスタントの人々が前述の意味で、非キプリアヌス的語句だと主張した点は正しかったし、またこれらのテキストがキプリアヌス自身の手によるものだとした点でカトリックの学者も間違っていないのである。

さて、キプリアヌスはオリジナル(原文)をどのように書き直したのか。確かな答えはわかっていないが、いくつかの事実からわかることがある。1933年D. van den Eyndeが指摘したように、洗礼問題で論争が始まる以前のキプリアヌスの著作中に、第二版の聖書引用箇所は見当たらないのである。そしてさらに司教団の一致を呼びかけて洗礼と結びつけている第4章の最後の文章は、その当時の特色をよくあらわしている。251年には司教の不和はどこにも見当たらないのである。そこで、かりにキプリアヌスが異端者による洗礼問題でステファヌス教皇と激しく対立していた時期に書き直したとすれば、ローマで異端者たちがかれに反対して教皇支持派の意味

あい、かれ自身のことばを引用し、かれの意図した以上に読み込んだという推測はあたっているであろう。それゆえキプリアヌスはあまりローマ色の出そうな文章を削除し、すでに異端者の洗礼に反対して教会の一致を弁護した際に使ったことのある聖書の箇所を新たに追加したのである。そして司教団の一致を呼かけてしめくくったのも、ステファヌス教皇(254—257)の時なら十分あてはまるが、コルネリウス教皇の始めのころとなると、時期があわなくなる。⁽²⁷⁾

いずれにせよ、この第4章をめぐる、いわゆる改ざん論争のために、キプリアヌスの説いている教会の姿に関する深い洞察と一致和合への努力を見逃さないようにしなければならない。

まとめ——結論にかえて

3世紀中ごろの教会はローマとアフリカでそれぞれ独自の発展をみせはじめ、共通の問題点をかかえていた。とくに三つの大きな問題が提起されて、解決を迫られていた。第1は悔悛の宗規に関する問題、第2は洗礼の問題、第3は司教職問題である。

キプリアヌスはこれら三つの問題と懸命に取り組んだわけであるが、上述のふたつの論争で、ローマに対する態度が異なっている。「棄教者」論争ではローマおよびアフリカ州の離教者と対立し、ローマ司教と手を握るが、洗礼の反復論争では、逆にローマのステファヌスと対立しているのである。このような態度から、第3番目の問題となるキプリアヌスの教会論が導き出される。

かれの著作の中に見い出される教会論には両極があることは確かである。一方ではかれは、ローマ司教と一致する司教団の上に成立する教会一致の偉大な証人の一人である。かれの著作『カトリック教会の一致について』がこの点を示してくれる。そして、「ペトロの首位権」*Primatus Petri* という語がこの著作の初版(P T)で主張されている。

しかし他方でかれは地方の司教権について明確な神学をもっている。司

教は教団一致の根源である。司教はその管区における最高権威者である。そして特に、司教は先人たちから継承した聖伝の保護者である。それゆえかれは、この二つの面を次々に強調していったのである。M. ベヴノが指摘したように、かれは前著の第二版ではペトロの首位権に関する原文を修正し、これに代えて教会の単一性へのより一般的な理論を展開したという事実があるが、ここにその具体的な証拠が見い出せるのである。²⁸⁾

以上、キプリアヌスの全体像を素描してみたが、かれの生涯と著作とすべての活動を通して強く印象づけられた点は、教会のすべての心配をにない、その一致を絶えず心にかけて、殉教者としてのいのちをささげたことである。かれの取り次ぎを求めらわたしたちの信仰と勇気を強め、教会の一致のためにたゆまず働く力が与えられますように……

BIBLIOGRAPHY

I. CYPRIAN

- A. d'Alès, *La théologie de S. Cyprien* (Paris, 1922).
E. W. Benson, *Cyprian, his Life, his Times, his Work* (London, 1897).
M. Bévenot, 'Cyprian', *New Catholic Encyclopedia* (New York—London 1967), iv, pp. 364—7.
H. von Campenhausen, *Fathers of the Latin Church* (E. T., London, 1964), pp. 16—60.
E. Dekkers, *Clavis Patrum Latinorum* (Sacris Erudiri iii, Steenbrugge, 1961—2), nn. 38—56 (pp. 8—11, 634).
A. Ehrhardt, 'Cyprian, Father of Western Christianity', *Church Quarterly Review* cxxxiii (London, 1941—2), pp. 178—96.
J. H. Fichter, *Saint Cecil Cyprian, Defender of the Faith* (St. Louis—London 1942).
H. Koch, *Cyprianische Untersuchungen* (Bonn, 1926).
P. de Labriolle, *Latin Christianity* (E. T. London, 1924), pp. 131—68.
P. Monceaux, *Histoire littéraire de l'Afrique chrétienne ii: S. Cyprien et son temps* (Paris, 1902).

- J. Quasten, *Patrology ii* (Utrecht – Antwerp, 1953), pp. 340 – 82.
G. S. M. Walker, *The Churchmanship of St. Cyprian* (Ecumenical Studies in History 9, London, 1968).

II. TEXTS

- J.P.Migne, *Patrologia Latina* iv (Paris, 1865), pp. 477 – 536.
W. Hartel, *S. Cypriani Opera Omnia* (Corpus Scriptorum Ecclesiasticorum Latinorum iii, Viena, 1868), pp. 207 – 64.
J. Martin, *De Lapsis* (Florilegium Patristicum 23, Bonn, 1930).
J. N. Bakhuizen van den Brink, *S. C. Cypriani... Scripta Quaedam* (The Hague, 1946), pp. 22 – 79.
M. Bévenot, 'De ecclesiae catholicae unitate', *The Tradition of Manuscripts* (Oxford, 1961), pp. 96 – 123.
Translation only, with notes:
M. Bévenot, *The Lapsed and The Unity of the Catholic Church* (Ancient Christian Writers 25, Westminster, Md – London, 1957).

III. DE LAPSIS

(Apostasy and Penance)

- M. Bévenot, 'The Sacrament of Penance and St. Cyprian's *De Lapsis*', *Theological Studies* (Woodstock, Md.), N. S. xvi (1955), pp. 175 – 213.
P. Fraenkel, 'Solus dominus misereri potest. Saint Cyprien, De lapsis, ch. xvii, et le problème de son interprétation, *Texte und Untersuchungen* (107), *Studia Patristica* X (Berlin, 1970), pp. 71 – 6,
J. Grotz, *Die Entwicklung des Bußstufenwesens in der vornicänischen Kirche* (Freiburg, 1955).
S. Hübner, 'Kirchenbuße und Exkommunikation bei Cyprian', *Zeitschrift für Katholische Theologie (Z. K. T.)*, lxxxiv (Frankfurt, 1962), pp. 49 – 84, 171 – 215.
B. Poschmann, *Paenitentia Secunda* (Bonn, 1940), pp. 398 – 424.
— *Penance and the Anointing of the Sick* (E. T. Freiburg – London, 1964, 3rd. ed. 1966), pp. 52 – 62.
K. Rahner, 'Die Bußlehre des hl. Cyprian von Karthago', *Z. K. T.* lxxxiv 1952, pp. 257 – 76, 381 – 438.
— 'Bußdisziplin' in *Lexikon für Theologie und Kirche* ii (Freiburg, 1958), pp. 805 – 9.

IV. DE ECCLESIAE CATHOLICAE UNITATE

(Bishops and Unity)

- M. Bévenot, *St Cyprian's 'De Unitate', Chap. iv, in the Light of the Manuscripts* (Analecta Gregoriana X I, Rome, 1937).
- “Primatus Petro datur” :St. Cyprian on the papacy’, *Journal Theological Studies* (J. T. S.), N. S. V (Oxford, 1954), pp. 19–35.
- L. Campeau, ‘Le texte de la primauté dans le “De Cath. Eccl. Unitate” de S. Cyprien’, *Sciences ecclésiastiques* xix (Montreal, 1967), pp. 81–110, 255–75.
- A. Demoustier, ‘Épiscopat et union à Rome selon S. Cyprien’, *Recherches de science religieuse* lii (Paris, 1964), pp. 337–69; ‘L’ontologie de l’Église selon S. Cyprien’, *ibid.*, pp. 554–88.
- S. L. Greenslade, *Early Latin Theology, Selections* (Library of Christian Classics v, London, 1956), pp. 113–72.
- E. Giles, *Documents Illustrating Papal Authority* (A. D. 96–454) (London, 1952), pp. 37–43, 49–79.
- T. G. Jalland, *The Church and the Papacy* (London, 1946), pp. 155–78.
- H. Koch, *Cyprian und der römische Primat* (T. U. 35, 1, Leipzig, 1910).
- H. Koch, *Cathedra Petri* (Beiheft zur Z. N. T. W. II, Giessen, I 930).
- J. Le Moyne, ‘S. Cyprien est-il bien l’auteur de la rédaction brève du *De Unitate* chapitre 4?’, *Revue bénédictine* lxxiii (Maredsous, 1953), pp. 70–115.
- J. Ludwing, *Die Primatworte Mt. 16, 18–19 in der altkirchlichen Exegese* (Neuestm. Abhandl. 19, Münster, 1952).
- A. Matellanes, ‘Communicatio, El contenido de la comunión eclesial en San Cipriano’, *Communio*, vol. i (Granada, 1968), pp. 19–64, 347–401.
- J. C. Plumpe, *Mater Ecclesia: an Inquiry into the Concept of the Church as Mother in Early Christianity* (Washington, 1943), ch. 6: Cyprian.
- B. Poschmann, *Ecclesia Principalis : ein kritischer Beitrag zur Frage des Primats bei Cyprian* (Breslau, 1933).

V. FOR GENERAL BACKGROUND

- H. Bettenson, *The Early Christian Fathers: A Selection from the Writings of the Fathers from St. Clement of Rome to St. Athanasius* (Oxford, 1956, paperback, 1969).
- J. P. Brisson, *L’autonomisme et christianisme dans l’Afrique romaine de Septime Sévère à l’invasion vandale* (Paris, I 958).

- B. C. Butler, *The Idea of the Church* (London, 1962).
- H. von Campenhausen, *Ecclesiastical Authority and Spiritual Power in the Church of the First Three Centuries* (E. T., London, 1969).
- K. Delahaye, *Ecclesia Mater, chez les Pères des trois premiers siècles* (Paris, 1964).
- D. van den Eynde, *Les normes de l'enseignement chrétien dans la littérature patristique des trois premiers siècles* (Univ. Cath. Lovan., diss. Fac. theol. ser. 2, tom. 25, Cembloux & c., 1933).
- W. H. C. Frend, *The Donatist Church, a Movement of Protest in Roman North Africa* (Oxford, 1952).
- *Martyrdom and Persecution in the Early Church* (Oxford, 1965).
- S. L. Greenslade, *Schism in the Early Church* (London, 1953).
- S. Laeuchli, *The Serpent and the Dove. Five Essays on Early Christianity* (London, 1966).
- H. Pétré, *Caritas* (Louvain, 1948).
- M. Spanneut, *Le stoïcisme des Pères de l'Église* (Paris, 1957).
- H. J. Vogt, *Coetus sanctorum, Der Kirchenbegriff des Novatian und die Geschichte seiner Sonderkirche* (Bonn, 1968).

注

- 1) キブリアヌスの殉教に関する公式記録は *Acta Proconsularia Sancti Cypriani Episcopi et Martyris* である。ここで引用した邦訳抜粋はつぎの本からである。キブリアヌス著・熊谷賢二訳『偉大なる忍耐・書簡抄』pp. 1 - 5 (上智大学神学部編・創文社 1965 年)
- 2) A. アマン著・家入敏光訳『教父たち——生涯と作品入門』, 92 - 106。(エンデルレ書店・1972 年)
- 3) cf. Quasten, *Patrology* II (Utrecht - Antwerp, 1953) pp. 340 - 382; 注 1 の前掲書参照: 伝記類は Bibliograh y I. CYPRIAN 参照。
- 4) Cf. Quasten, *ibid.* 著作に関するリストはつぎのとおりである。① Pontius, *Vita et Passio Sancti Caecilii Cypriani, Episcopi Carthaginensis et Martyris*, ch. 7. 中に 12 編あげられている。② Mommsen の出版した古写本 (359 年付, Philipp von Cheltenham の蔵書) の中にあるもので, Pontius に若干の補足がなされている。③ G. Morin の出版の聖アウグスティヌスの説教「聖キブリアヌスの誕生について」De natale Sancti Cypriani の中に出ているもの。以下各著作については最小限の説明にとどめる。
- 5) 友人ドナトゥスに宛て書かれたもので, 回心における神の恵みのすばらしい効果が描かれている。受洗直後の 246 年の著作。

- 6) 宗教上の規律改善を心にとめ、おとめたちを戒めて、虚栄と悪徳に満ちた異教世界から付きまとう誘惑の危険について忠告している(249年司教叙階後)。
- 7) 251年の春デキウス帝の迫害中に避難先から帰って書かれたもので、背教者に対するアフリカ教会の統一行動をとる根拠となった。
- 8) キプリアヌスの著作中で中心的な役割を果たすもので、251年の春、司教会議の折りに発表された。カトリック教会の一致の根拠を主キリストがひとりの弟子、すなわちペトロの上に教会を建てたという点に求め、異端と分裂の根を断ち切ろうと努めている。本稿では、第4章をめぐるさらに詳しい考察がなされている。『南山神学』第8号、pp.113-136(南山大学・1985)に拙訳あり。
- 9) 251~252年ごろに書かれたもので、主の祈りを最高の祈りと指摘し、キリスト教信仰の要約とみなしている。
- 10) かれの著作中でこの著作だけは辛辣な口調で書かれている。伝染病をはやらせたのはキリスト教徒の仕業だという異教徒の訴えに対する弁明の書。
- 11) 252年、カルタゴにまで伝染病が蔓延したとき、病人看護と死者の埋葬のために世話をする人たちを集め、死について書かれた美しいパンフレット。
- 12) キプリアヌスの慈善や施しに対する批判にこたえて、そのキリスト教的性格、必要性などを説いている。255年ごろ。
- 13) 異端者の洗礼が有効か無効かをめぐって激しい論議がかわさっていた時(256年)、司祭や信徒たちを平和と一致と呼びもどすために書かれたもの。邦訳に関しては注の1参照。
- 14) 注の13とほぼ同じころ書かれたもの。
- 15) 殉教に関してフォルトゥナトゥス(対立司教)宛に書かれたもの。
- 16) *Testimonia ad Quirinum*. 教理教育で使用した聖書のテキストを記録し集成したもので全3巻よりなる。「証言」*Testimonia* という文学ジャンルの重要な一例とされる。
- 17) 著者が問題となった著作、H. Kochがキプリアヌスの作と断定した。(cf. H. Koch, *Cyprianische Untersuchungen* (Bonn, 1926)).
- 18) 注1の前掲書にこの書簡中、第8、5、52、54、56、57、77の7編だけが書簡抄として邦訳されている。
- 19) cf. Quasten, *ibid.*(1)(2)
- 20) J. ダニエルー著・上智大学中世思想研究所編訳『キリスト教史』第1巻「初代教会」pp.400-401(講談社1980年)
- 21) cf. Quasten, *ibid.*
- 22) cf. ダニエルー、前掲書 pp.401-402
- 23) cf. Quasten, *ibid.*
- 24) cf. Quasten, *ibid.*
- 25) 3世紀初頭はキリスト教の歴史における決定的な転換期であった。ユダヤ・キリス

ト教との最後の絆が断たれ、キリスト教はこの時以降、ヘレニズムとローマの世界に入っていく。

3世紀中葉はラテンの西方教会がすべての面で伸長し、その独創性を示し始める時期である。教会はガリア、ヒスパニア、イタリア、イリュリクム（現ユーゴスラヴィア）に広がる。しかしキリスト教の二大中心地はあくまでカルタゴとローマであり、この二都市を中心にキリスト教は驚異的に伝播し、キリスト教徒の数も著しく増加するのである。

キプリアヌスと同じ日に祝われるコルネリウス教皇（在位 251-253）の手紙によれば、当時のローマの聖職者として司祭 46 人、助祭 7 人、副助祭 7 人、侍祭 42 人、祓魔師、読師そして守門が 56 人いると記述されている。（エウセビウス『教会史』VI, 43, 11）。イタリア半島では司教座の数が増大し、ノヴァティアヌスを糾弾する 251 年のローマ地方の教会会議には、60 人の司教が集合している。これらの司教座はローマ市周辺に集まっているが、ローマがその中で総大司教座のような立場にある。そして 260 年の会議ではアレクサンドリアのディオニュシオス問題が取り扱われ、その決定事項が他の教会会議に伝達されている。それゆえ、三世紀中葉には教会全体に明確化した一つの組織があったようである。ローマ地方の教会会議とローマ司教自身は特別な権威もっていたようであるが、これを特に認めているのがキプリアヌスである。

第二の大中心地はカルタゴである。アフリカ教会はローマ教会に比べると多くの点で際立った個性を見せている。アフリカ教会はローマ教会より等質であった。3世紀前半に驚異的な発展を遂げる。220 年ごろカルタゴで開催された教会会議には司教 70 人が集まっている。240 年ごろには 90 人を数えるが、これは 256 年のキプリアヌスが開催した教会会議にも見られる数字である。

3世紀中葉の教会の直面していた三つの大きな問題とは、第1に悔悛の宗規に関する問題、つまり「棄教者」をどのようにして教会と和解させるかということ。第2は洗礼の問題、すなわち異端者によって授けられた洗礼は有効か無効かという難問。第3は教会の組織の問題、つまり普遍教会の一致、ローマ司教の首位権と地方教会の諸権利の関わり等についてである。（cf.注の 20, 前掲書 pp.394-407）

26) cf. M. Bévenot, S. J. "Introduction" in *Cyprian, De Lapsis ; De Ecclesiae Catholicae Unitate* (Oxford 1971) pp. xi-cv.および Quasten, *ibid.* p. 352

27) cf. M. Bévenot, *ibid.*

28) ダニエルー、前掲書 pp.404-407

Cyprianus, *De Ecclesiae Catholicae Unitate*. (2)

— The “interpolations” in Chapter 4 —

Kiyoshi YOSHIDA

In my previous study, St. Cyprian's Latin Text, *De Ecclesiae Catholicae Unitate*, was translated into Japanese for the first time (Cf. No. 8 of *Nanzan Shingaku*, pp. 113-136). This time, one of the textual problems, known as the “interpolations,” in chapter 4 is treated. As a general introduction, I added his martyrdom, his life, his writings, and some characteristics of his theology (Cf. Quasten, *Patrology*, II, Utrecht 1953, pp. 340-82).

Two centuries after Christ, Cyprian was bishop of Carthage in North Africa for less than ten years. The landmarks of his episcopate can be briefly told. First, there was the fierce and protracted persecution of Decius (250-1); then, the threat of renewed persecution under Gallus (252) which, however, did not materialize in Carthage; there was also a serious outbreak of the plague that same year. Later a the prolonged dispute (255-6) over the recognition of baptisms conferred outside the Church occurred, this brought Cyprian into direct conflict with Stephanus, the Bishop of Rome. Lastly, the persecution of Valerianus (257-8) forced him to spend his last year in exile from Carthage, but this did not prevent his returning to achieve his martyrdom there (14 September 258). His martyrdom which is quoted here is based on the official *Acta proconsularia*. I put it in the first place in this article, according to a special inspiration which I had while celebrating Mass on his feast day, September 16, 1985. At the same time, St. Cyprian encouraged me in my studies of his writings to translate them into Japanese one by one. His many writings are divided into so-called “treatises” — mostly addresses to his people — and the large number of his letters. Some characteristics of his theology are summarized as ecclesiology, Primatus Petri, Baptism, Penitence, and Eucharist.

Lastly, the “interpolations” in chapter 4 are treated. That the *De Ecclesiae Catholicae Unitate* was published in two distinct editions, which differ from each other chiefly in chapter 4 (and 19), can be shown by the study of the extant manuscript of the treatise.

Most of these carry what is here called the second edition (or TR = *textus receptus*); but there is one manuscript which presents the first edition (PT = “Primacy Text”) and no more. This is H, a twelfth-century manuscript from the Cistercian monastery of Morimont in France. But a good number of Manuscripts have combined the two: some give both PT and TR, one after the other, etc. What, then, made Cyprian revise his original text? There is no sure answer, but a few facts may be significant. The scripture texts of the second edition do not appear in Cyprian’s writings before the outbreak of the baptismal controversy; and the last sentence of chapter 4, which links baptism with an appeal for unity among the bishops, is characteristic of the period too, whereas in 251 there was no sign yet of episcopal disunity. If, then, Cyprian revised it during his sharp disagreement with Stephanus over the baptism of heretics, it is a fair conjecture that at Rome they were quoting his own words in a “papalist” sense against him, reading more into them than he had intended. He therefore removed the phrases which could bear too “Roman” a sense, added the new scripture texts which he was already using in defense of the Church’s unity against heretical baptism, and ended with an appeal to the bishops for unity — appropriate enough in Stephanus’s time, but out of place in the early days of Cornelius.

This passage of the *De Ecclesiae Catholicae Unitate* has been the cause of misplaced controversy, but we should keep in mind the valuable insights of St. Cyprian into the nature of the Church. (Cf. M. Bévenot, *Cyprian, Text and Translation*, Oxford 1971).